

かんちけん倶楽部

— 活動報告 —

■ 「一般公開」、「きみもなろう！砂漠博士」を実施しました。

7月22日(土)、乾燥地研究センター一般公開及び小学生向け実験イベント「きみもなろう！砂漠博士」を開催しました。今年的一般公開は、センター本館改修工事のため、規模を縮小して実施しましたが、一般市民186名の方にご来場いただきました。小学生向け実験イベントは募集人数15名だったところ21名に増やして実施しました。小学生向け実験イベント「きみもなろう！砂漠博士」は、「DNAと遺伝子について学ぶ」というタイトルで、ブロッコリーからDNAを取り出す実験を行い、DNAや遺伝子組み換え植物などについて学びました。一般公開は、実験室見学ツアーを2回と砂丘ナイトツアーを行い、また、留学生による外国料理の提供コーナー、砂絵作りコーナー、アリドドームライトアップなど、例年より規模を縮小しつつも、実験施設らしく研究内容を紹介したり、異国の文化(食べ物)に触れたり等、子供から大人まで楽しんでいただけるような内容を企画しました。実験室見学ツアーでは、研究者の解説を聞きながら、実験圃場(畑)、デザートシミュレーターと呼ばれる温度、湿度、光度を設定できる実験用温室を見学しました。砂丘ナイトツアーでは、夕方から夜にかけて、砂丘について地質から砂丘植物まで幅広い話を聞きながら、敷地内の砂丘を歩きました。なお、アンケートによると毎年来場くださる方や、来年も参加したいと仰ってくれる方など、反応も良く、どの企画もおおむね好評で来場者の皆様に楽しんでいただけたようでした。



きみもなろう！砂漠博士の実験の様子



実験室見学ツアーの様子

■ サウジアラムコ社への訪問が、同社の社報等で紹介されました(2017年6月29日)。

本センターは2016年、サウジアラビア国営石油会社サウジアラムコの日本法人であるアラムコ・アジア・ジャパン株式会社と研究支援に関する合意書を取り交わしています。2017年3月、山中センター長と辻本副センター長はサウジアラムコ本社の環境保護部門を訪問し、乾燥地研究に関する意見交換、今後の共同研究と連携強化についての協議を行いました。この度、このときの様子が同社の社報に掲載され、またホームページでも紹介され、本センターをアピールする大変よい機会となりました。



アラムコ本社にて

(<http://japan.aramco.com/ja/home/news-and-media/news/alrc2017.html>)

■ 「ハートワーク中ノ郷」で中ノ郷中学校2年の生徒4名がやって来ました。

6月19日から23日まで、毎年恒例の職場体験「ハートワーク中ノ郷」で中ノ郷中学校2年の生徒4名を受入れました。5日間、センター教員、研究員、技術部が持ち回りで担当し、実験作物の生育調査、作物栽培のためのかん水設備の敷設、分析のためのサンプル調整、飛砂を測定する機械の検出程度の検討、野生動物を自動観測する装置の整備など、研究の手伝いを体験してもらいました。また、環境の変化が及ぼす人の体への影響を調べる等、乾燥地に関する知識を深めたほか、鳥取警察署の講師による外国人対象防犯講習会に留学生たちと一緒に参加、7月開催の小学生向け実験イベントのデモ実験に挑戦等、毎日多分野に渡る盛りだくさんの内容となり、中学生にとって、充実した5日間となりました。中学生たちにはどの内容にも興味を持ち、意欲的に取り組んでももらいましたが、中でもDNA関連の実験が難しいこともあって印象に残ったようでした。



DNA 実験を行う 4 名の学生さん

■ 文科省審議官がセンターを訪問されました。

8月4日、文科省研究振興局担当の板倉審議官と学術機関課の中村係長がセンターを訪問されました。山中センター長及び辻本副センター長から、乾燥地研究の経緯、全国共同利用・共同研究拠点等について概要説明を受けられた後、気温35℃の厳しい暑さのなか、現場の視察が行われました。共同実験農場（圃場）では東京大学とのダイズの共同研究について説明を受け



圃場の説明を行う辻本教授

られ、グロスチャンパー棟では気候変動チャンパー及びデザートシミュレータでコムギ等の実験をご覧いただきました。また、アリドドームでは砂漠化機構解析風洞システム、塩分動態モニタリングシステム等の実験機器・設備を視察され、終始熱心に質問され、意見を交わされるなど、乾燥地科学拠点としてのセンターの役割と活動の状況について理解を深めていただいた様子でした。

■ 国連砂漠化対処条約第13回締約国会議(UNCCD/COP13)に参加しました。

本センター及び国際乾燥地研究教育機構は、9月6日から16日にかけて開催された国連砂漠化対処条約第13回締約国会議(UNCCD/COP13)に参加しました。同会議は、1997年にローマで開催された第1回会議後、2年毎を目処に開催されており、本年は中国・内モンゴル自治区オルドス市にて開催され、締約国政府、国際機関、市民社会団体(CSO)等から多数の関係者が参加しました。本センターからは恒川教授が政府代表団の一員として参加したほか、環境省及びJICAと砂漠化対処や乾燥地における持続可能な土地管理に向けた日本の取組みについて、また、海外連携機関である中国科学院西北生態環境資源研究院(NIEER)



環境省・JICAと共催のサイドイベントで発表する恒川教授(右から2番目)

と風成砂漠化への対処と土地劣化中立性の実現についてのサイドイベントを共催し(黒崎准教授が講演)、COP参加の政府代表団、専門家、国際研究機関関係者などと研究発表や意見交換を行いました。わが国唯一の「乾燥地科学」の研究拠点を有する鳥取大学として、政府関係者、海外研究機関等とのネットワークを更に強化し、国際的プレゼンスを向上させる貴重な機会となりました。

■ 駐日ナミビア共和国大使が来訪されました。

9月20日、ナミビア共和国のソフィア・ナンゴンベ駐日特命全権大使とウーリッヒ・クルツ観光教育スポーツ親善大使がセンターを訪問されました。アフリカ南西部に位置するナミビアには世界最古と言われるナミブ砂漠があり、鳥取県には世界ジオパークに認定されている鳥取砂丘があることから、大使らは「砂」をキーワードとした友好関係の構築を目的に来県され、鳥取市長、鳥取県知事への表敬訪問の後、鳥取砂丘及び砂の美術館とともにセンターを視察されたものです。大使らは、山中センター長からセンターの概要、乾燥地研究について説明を受けられ、アリドドームと乾燥地学術標本展示室を見学されました。展示室内の世界の砂コーナーにはナミブ砂漠の砂が展示されており、大使らはナミブ砂漠の砂が他の砂漠と比較して大変赤いことに興味を持たれた様子でした。大使らは、センターの研究活動についても熱心に質問、意見交換されたほか、広大な禁猟区と自然保護区を持つナミビアの美しい大自然と人気の観光地をしっかりとPRされていました。



中央がナンゴンベ大使、右端がクルツ大使
(左の2人は随行の鳥取県担当者と通訳の鳥取市国際交流員)

— 研究成果 —

■ 国際疫学会でシンポジウムを主催しました。

センター及び国際乾燥地研究教育機構は、8月19日～22日に、さいたま市で開催された第21回国際疫学会において、「Desertification and Health: Human-Animal-Land Interaction in East Asia」と題したシンポジウムを主催しました。砂漠化の影響を疫学的に解明するという次期プロジェクトにつながる内容で、センターの大谷准教授のモデレーションにより、黒崎准教授、研究協力者であるモンゴル国立医科大学ダブルハン准教授、麻布大学の島田教授、山梨大学の大西准教授がそれぞれの専門の見地から砂漠化の影響、評価などについて発表を行い、活発な議論が展開されました。



講演を行う黒崎准教授

■ ビリー特命教授が国際シンポジウムで最優秀ポスター賞を受賞しました。

Paolo Billi (パオロ・ビリー) 特命教授が8月26日から30日の間、地形的要因で発生する自然災害防止をテーマとし、島根県と京都府で開催されたThe 15th International Symposium on Geo-disaster Reductionに参加しました。日本や中国をはじめ、イタリア、ドイツ、ベルギー、チェコなどの国々から80名程度の研究者が参加しました。Billi 特命准教授は、Yonas Tadesse 氏、Aklulu Amsalu 氏、Rossano Ciampalini 氏と共著した「Climate change, human impact and hydro-meteorological hazard in Dire Dawa district, Ethiopia」という表題のポスターを発表し、見事最優秀ポスター賞を受賞しました。



賞状を手に喜びのビリー特命教授

■ 限界地プロジェクトのワークショップを開催しました。

本センターが中心になって進めている「限界地プロジェクト」では、作物改良と保全型栽培管理技術を統合することにより、年間降水量 300 mm 台の降雨依存農業地域で、持続的な生産を可能にする農業技術パッケージを作ることに挑戦しています。9月6日から7日の2日間、現地実証の具体的な計画を策定するため、海外共同研究機関の研究者を交えてのワークショップを開催しました。



活発に議論を行う外国人研究者

■ 日本学術会議農学委員会育種学分科会における審議結果が公開されました。

辻本教授が連携会員の日本学術会議農学委員会育種学分科会において、「気候変動に対応する育種学の課題と展開」と題した報告書が9月27日に公開されました。昨今の気候変動下において、持続的な農業生産を確保することは世界が共有する喫緊の課題ですが、本報告書では、気候変動に対応して育種学が取り組む課題と展開方向についての議論及びわが国の育種学における発展を踏まえ、今後の国際連携による育種学研究強化の必要性及び育種学と環境農学の融合への展望等が示されています。
(<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-h170927-1.pdf>)

— お知らせ —

■ センター本館の改修工事が完了しました。

乾燥地研究センターでは今年3月2日より本館（総合研究棟）の改修工事を行っておりましたが、このたび9月25日に竣工いたしました。この改修により、センター内にアクティブ・ラーニング・スペースやオープンラボを設置することができ、センター内の学生同士の研究活動活性化、センター内の分析機器集約化により、より効率的な共同研究が行われることが期待されます。



新しく機能的になった本館

■ シンポジウム「黄砂と健康 ～越境汚染のいま～」

- 日時：平成29年11月11日（土） 10:00～12:00（受付9:30～）
- 場所：とりぎん文化会館 第1会議室
- 発表者：黒崎泰典 准教授、大谷眞二 准教授

■ 平成29年度 乾燥地研究センター共同研究発表会のお知らせ。

- 日時：平成29年12月2日（土）～3日（日）
- 場所：鳥取大学 鳥取キャンパス（共通教育棟2階 C21 講義室 他）

☆ 乾燥地学術標本展示室の休日公開

乾燥地研究センターでは、土・日・祝日の12～16時、「ミニ砂漠博物館」を公開しています。入場無料、予約不要ですので、この機会に是非ご覧下さい。

【とっとり乾地研倶楽部の設立趣旨】

砂漠化防止や乾燥地農業について世界的に貢献している鳥取大学乾燥地研究センターは、世界の乾燥地研究ネットワークの中核として学術研究、人材育成に大きな役割を果たしており、地域にとっても世界に誇るべき知的財産です。

そこで、鳥取大学乾燥地研究センターの活動を地域で支え、その研究活動と研究成果を広く情報発信することを通じてこの地域の発展を図るために「とっとり乾地研倶楽部」を設立しました。

発行：とっとり乾地研倶楽部事務局
鳥取商工振興協会 〒680-0031 鳥取市本町3丁目201番地
TEL (0857) 26-6886 FAX (0857) 22-0155

（編集）学術広報委員会委員 木村玲二・藤巻晴行・金田泰雄